

INTERVIEW

自治医科大学 医学教育センター
医療人キャリア教育開発部門 特命教授
菅野 武先生



自治医大にJADECOCOMの寄附講座誕生! つながりを大事に、地域に向き合う人 に対する総合医のような部門に。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

被災したことで与えられた伝える役割

山田隆司(聞き手) 今日自治医科大学に菅野武先生をお訪ねしました。この4月に自治医大に地域医療振興協会の寄附講座「医療人キャリア教育開発部門」が開設されましたが、菅野先生にはその特命教授として就任していただきました。菅野先生は2011年の東日本大震災後、米国TIME誌が特別号で発表した「世界で最も影響力のある100人」に選ばれたのでご存じの読者も多いとは思いますが、まずは先生のご経歴を簡単に紹介していただけますか。

菅野 武 私は宮城県出身で、2005年に自治医科大学を卒業しました。宮城県の場合は仙台市内で2年間の初期研修の後、へき地・山間地域を回

ることになっていました。私は3年目から2年間、栗原中央病院に赴任し、5年目から南三陸町の公立志津川病院に勤務しました。当時人口は1万7千人で、病院は126床の志津川病院しかなく、常勤医は私を含めて4名でした。

山田 126床で4名は大変ですね。

菅野 半分は療養病棟ではあったのですが、地域の中に医者が少なく何でも来るという状況で、慢性期はもちろん、急性期のファーストタッチは全部やるという感じでした。

そういう状況で6年目の最後になる3月、東日本大震災が発生したのです。7年目から学位を取るために東北大学の大学院に行くことを決

めていて、その準備をしていたところでした。

南三陸町は壊滅的な被害を受け、町民の約1,000人が津波そのもので亡くなったり行方不明になり、最大時は1万人、2人に1人以上が家のない状況で、民家あるいは避難所に避難しました。15メートルの波が街中に流れ込んできましたので、病院では可能な限りの人を上に乗がすという対応をしましたが、職員と患者さんを含めて3分の2の方が亡くなりました。自衛隊の救援が来るまで最上階に逃げた患者さんと一緒に過ごして、全病院避難という形になりました。私は13日に助けられて石巻に行き、後輩に車を借りて家族がいた仙台にたどり着きました。長男が3月16日に生まれる予定で、南三陸町には出産施設がなかったため、出産準備のために家族は私の実家がある仙台市内に移っていたのです。3月16日に子どもが生まれたところ、NHKの取材などが来て、NHKのネットワークで世界中にニュースが流れました。日本の被災と大勢の亡くなった人の前にいた私が新しい命を授かったというコントラストが、注目されたのだと思います。

子どもが生まれたあと、南三陸町に戻って1ヵ月間、避難所で自分も寝袋で過ごしながら受援活動をしました。いろいろなところから支援が来るのですが、誰がどこに行けばよいか、

どんなニーズがあるのか分からない状態で集まってくるので、地元の医療者として交通整理をするのが自分のミッションだと考えました。支援を受け止めてつなぐという活動をして、4月16日に仮設の新しい診療所が動き始めた翌日に仙台に戻り、5月から予定通り後期研修として東北大に行くことにしました。

そのタイミングでTIMEから「今年の100人に選ばれました」という連絡があったのです。日本中みんなが大変な思いをしているのにどうして自分が選ばれるのだらうと思いましたが、いろいろな人に、「日本人がどれだけ大変な思いをしてきたか伝えてこい」と言われたので、メッセージだと考えて、ニューヨークで行われたTIMEのパーティーに出席しました。「日本人は大変な思いをしているけど、負けないから見えてくれ」ということを繰り返し伝えました。アメリカで会った人々はみな「これほど大変なことが起こって、日本人はどうして黙っているんだ？ 世界中に日本を助ける思いがある」と言っていました。「君はこうやって選ばれて来たのだから、どんどん発信しなくてはいけない」とも言われ、伝える価値はすごくあると痛感し、その後自分のライフワークとして、伝えていく活動につながったと思っています。

地元の東北大学とのつながり

山田 東北大学の大学院ではどんな仕事をされたのですか。

菅野 消化器内科で臨床の研鑽もしましたが、一方

で震災後に胃潰瘍、十二指腸潰瘍が非常に増えたということを研究としてまとめたのが、自分の学位論文になりました。義務年限としては、